

江戸東京研究センター

【2024年度大学評価総評】

2024年度自己点検・評価シート、2023年度中期目標・年度目標達成状況報告書、2024年度中期目標・年度目標達成状況報告書をみるかぎり、すべての評価項目において、適切な対策が練られ、コロナ後の状況を活用し、着実に目標充足が進展していることが確認できる。2022、2023年度の活動について学外有識者から第三者評価を受けている。国際目標としてのSDGs達成期限が残り7年を割り、このままでは完全達成はほぼ不可能なことが明らかになっている。引き続き、長期的かつ歴史的な視野をもって、持続可能な都市の在り方を文明論的に再検討することが国際的に重要な課題である。国際的にみてもユニークなプロジェクトとしての江戸東京研究センターは、その課題に真正面から取り組むものであり、今後の活躍がますます期待されるものとなっていると言えよう。

大学基準協会の第4期大学基準に基づいた評価項目の充足状況の確認

2024年度自己点検・評価シートに記載された
I 現状分析を確認

すべての評価項目で「はい」が選択されており、充足していることが確認できた。

【2024年度自己点検・評価結果】

I 現状分析

基準1 理念・目的

1.1 大学の理念・目的を適切に設定すること。また、それを踏まえ、学部及び研究科の目的を適切に設定し、公表していること。

1.1①研究所（センター）の理念・目的を明らかにしていますか。	はい
1.1②研究所（センター）の理念・目的を規則等に明示し、かつ教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学江戸東京研究センターHP (https://edotokyo.hosei.ac.jp/)	

基準2 内部質保証

2.1 内部質保証のための方針を適切に設定していること。また、教育の充実と学習成果の向上を図るために、内部質保証システムを整備し、適切に機能させていること。

2.1①研究所（センター）において、研究所長（センター長）及び運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。	はい
2.1②研究所（センター）において、自己点検評価結果を活用して改善・向上に取り組んでいますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学サステナビリティ実践知研究機構規程 法政大学サステナビリティ実践知研究機構細則 法政大学サステナビリティ実践知研究機構会議規程 法政大学江戸東京研究センター運営委員会議事録	

基準3 教育研究組織

部局による自己点検・評価は実施しない

基準4 教育・学習

部局による自己点検・評価は実施しない

基準5 学生の受け入れ

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 6 教員・教員組織

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 7 学生支援

部局による自己点検・評価は実施しない

基準 8 教育研究等環境

8.1 研究活動に関わる支援、条件整備を通じ、研究活動の促進を図っていること。また、健全な研究活動のために必要な措置を講じていること。

8.1①「法政大学研究倫理規程」に沿って、学生も含めて研究倫理の遵守を図る取り組みを行っていますか。	はい
【根拠資料】	
2023 年度コンプライアンス研修受講者名簿 2024 年度コンプライアンス研修受講予定者名簿	

基準 9 社会連携・社会貢献

9.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施していること。また、教育研究成果を適切に社会に還元していること。

9.1①「研究及び社会貢献に関する方針」のもと、学外機関、地域社会等との連携、大学が生み出す知識、技術等を社会に還元する取り組みを行っていますか。	はい
【根拠資料】	
イタリア大使館プロジェクト報告書 Old meets New 東京街歩きツアー事業のコンテンツ監修に関する協定書（東京観光振興） NHK 文化センター青山教室「1年で学ぶ教養 新・江戸東京研究」 (https://www.nhk-cul.co.jp/programs/program_1265216.html)	

基準 10 大学運営

部局による自己点検・評価は実施しない

上記の現状分析結果において、【いいえ】と回答した項目があった場合は、その理由と改善計画について記入してください。

大学基準	【いいえ】と回答した点検・評価項目を記述してください
基準を選択してください	
【いいえ】と回答した理由と、改善の必要がある場合、改善計画について記述してください。	

II 改善・向上の取り組み**1 2023 年度 大学評価委員会の評価結果への対応**

【2023 年度大学評価結果総評】（参考）
<p>私立大学研究ブランディング事業終了後の第2フェーズの時期を迎えた江戸東京研究センターが、そのグラウンドデザインを「記憶から創造へ」および「過去を知り、近未来への道筋を示す」として、歴史的な記憶や経験を近未来の東京の創造に活かすための研究活動を行うことを目標としたことは、本研究センターが本来の意味での社会貢献を目指そうとする姿勢の明示的な現れとして高く評価できる。また、研究センター全体の従来の研究枠組みを、(A)「地理情報システムと名所の景観」、(B)「江戸東京の文学と都市史」、(C)「表象文化と近未来デザイン」の三つのプロジェクトに再編成したことも高く評価できる。</p> <p>外部評価委員が「文理融合」の困難を指摘して、「文理複眼」、「文理協働」を提起していることを受けて「文理複眼」の研究を目指すとしているが、「江戸東京アトラス」という4つ目のプロジェクトを</p>

立ち上げ、文理協働を実際に進めている点は大いに評価すべき点であると思われる。また、文理複眼についても、現実社会の問題解決を工学系が押し進め、一方で文科系がそれぞれの事象の本質に迫ろうとすることで、他の追随を許さない研究成果の分厚い蓄積に立脚した自信と自律性のある研究活動を推進していると感じ取ることができる点は大いに評価したい。江戸東京研究センターが、これまでの「ブランディング」の域を脱却して、法政大学を代表する地に足のついた基幹的研究機構のひとつとして、また、法政大学憲章にある「実践知」を体現する研究活動の担い手となっていくことを期待したい。

【2023年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2023年度は、本研究センターのこれまでの研究成果にかかわる3冊の日本語書籍、1冊の英語書籍を刊行することができた。また、新しいフェーズとして、歴史的な記憶や経験を近未来の東京の創造に活かすための研究活動を行うことを目標とし、2023年度は研究会2回、国内でのシンポジウム3回を公開で開催した。研究会は、小説家の講演や下北沢のフィールドワークを通して、街の歴史と身体感覚、再開発の状況を紐解きながら、過去・現在・未来の東京の在り方を模索する会となった。シンポジウムでは、これまで江戸東京研究センターが対象としてこなかった関東大震災、伊豆諸島、東京湾をテーマとした。都市史、建築史、文学、自然地理学、地図史、経済史などの様々な専門家による発表と総合討論は、江戸東京研究における「文理複眼」の有効性が際立った企画となった。さらに「文理複眼」による研究活動の一環として、江戸東京研究センターのメンバーとヴェネツィアのカ・フォスカリ大学や建築大学のメンバーと共同で国際シンポジウムを開催し、江戸東京とヴェネツィアのPublic SpaceとPrivate Spaceの関係を多角的に論じることができた。

また、2024年2月には再び外部評価委員会を開催し、江戸東京研究センターの研究活動とその成果について、3名の外部識者による高い評価を得た。さらに、これまでの「ブランディング」の域を脱却し、「文理複眼」の学術研究を高度に推進するための外部資金を獲得することも目標である。2023年度は、三菱財団の人文科学研究助成（社会的課題解決のための大型連携研究助成）に申請し、2024年5月現在結果を待っている。

センターの研究活動を社会に還元する取り組みとして、2023年度はNHKカルチャーセンター青山教室において「新・江戸東京研究」の連続講座を開講し、江戸東京研究センターの研究員のなかから様々な分野の専門家12名の講師を派遣した。2024年度からは、新規の取り組みとして、東京街歩きツアー事業を行う。2023年度は東京観光財団と協定を結び、その準備を整えた。法政大学憲章にある「実践知」を体現する取り組みを続けていきたい。

2 各基準の改善・向上

基準6 教員・教員組織

6.3 教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。

6.3①研究所（センター）内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S（さらに改善した又は新たに組み込んだ）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
<p>2024年2月27日に外部評価委員会を対面で開催した。高橋栄一（都市出版株式会社代表）、藤森照信（建築家）、吉見俊哉（國學院大学教授）の3名の外部評価委員から、江戸東京研究センターの研究活動について高い評価を受けた。外部の専門家からのコメントを積極的に取り入れつつ、2024年度以降も各プロジェクトの教員が研究活動を行う。</p> <p>2022年度/2023年度活動についての外部評価委員会次第 日時：2024年2月27日（火）10時～12時 対面開催 会場：ポアソナード・タワー26階 A会議室</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 開会挨拶（米家志乃布センター長） 2. 活動報告 <ol style="list-style-type: none"> (1) 全体（米家志乃布センター長） 2022年度/2023年度の江戸東京研究センターの研究活動について EToS 叢書 vol.4『新・江戸東京研究の世界』（2023）法政大学出版局 (2) 「地理情報システムと名所の景観」プロジェクト（福井恒明教授） 		

(3) 「江戸東京の文学と都市史」プロジェクト (小林ふみ子教授) (4) 「近未来デザインと表象文化」プロジェクト (岡村民夫教授・山道拓人准教授) (5) 「国際共同研究 Edo Castle Mission」プロジェクト (高村雅彦教授) (6) 「イタリア大使館庭園」プロジェクト (陣内秀信特任教授) (7) ヴェネツィア・シンポジウム報告 (陣内秀信特任教授) 3. 評価委員からの講評 (1) 藤森照信氏 (2) 吉見俊哉氏 (3) 高橋栄一氏 4. 閉会挨拶 (高村雅彦前センター長)

基準9 社会連携・社会貢献

9.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施していること。また、教育研究成果を適切に社会に還元していること。

9.1②社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。	S. さらに改善した又は新たに組み込んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S (さらに改善した又は新たに組み込んだ)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
<ul style="list-style-type: none"> ・外濠市民塾は、しばらく Covid-19 による活動の縮小を余儀なくされていたものの、対面での本格的な活動再開にむけて、2023 年度は新体制の活動の試行と今後の活動計画をたてた。 ・イタリア大使館内に残る江戸の大名庭園を調査し、その成果をシンポジウムで公開し、かつ報告書を作成して、関係諸機関に配布した。 ・NHK カルチャーセンター青山教室において「新・江戸東京研究」の連続講座を開講し、多くの受講者を得た。江戸東京研究センターから 12 名の講師を派遣した。 ・2024 年度から東京観光財団と連携して東京街歩きツアー事業を行う予定である。2023 年度は東京観光財団と打ち合わせを行った。江戸東京研究センターと東京観光財団の間で協定を結び、準備を整えた。 		

III 2023 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	研究活動
中期目標	国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが協働することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。
年度目標	①2020 年 1 月にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で江戸東京に関する国際シンポジウムを開催した。そのシンポジウムの内容を 2023 年度中に英語で刊行する。 ②2024 年 1 月に再びヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で江戸東京に関するシンポジウムを英語で開催予定である。本年は過去の国際シンポジウムの英語書籍での刊行と新たな国際シンポジウムの英語での開催を中心に、江戸東京研究センターならではの国際的な研究活動を実施する。これらの成果を発信、アピールすることで、法政大学のブランディング形成のために欠かせない組織であることを改めて示す。
達成指標	①英文著書の刊行 ②国際シンポジウムの開催、の実現・実施を指標とする。
年度末報	執行部による点検・評価
	自己評価
理由	①2020 年 1 月のシンポジウムの内容をまとめた英語書籍『Tokyo and Venice as Cities on Water : Past Memories and Future Perspectives』(Cambridge Scholars Publishing、2023 年 12 月)を刊行した。

告		②2024年1月11日～13日の3日間にわたり、「Public and private spaces in Tokyo and Venice: The role of local communities and values」と題する国際シンポジウムを、ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で開催した。以上、年度目標に掲げたとおり、当センターならではの国際的な活動を実施することができた。
	改善策	特になし
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。
年度目標		①NHK 青山カルチャーセンターにおける〈新・江戸東京研究〉連続講座への講師派遣 ②研究会・シンポジウムの一般公開 ③新聞社や出版社との連携による記事の掲載 ④著書の刊行など、多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実にこなう。
達成指標		年度目標の①～④において、江戸東京研究センター研究員による講義および研究会・シンポジウムの実施、記事や著書の刊行を指標とする。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	①NHK 青山カルチャーセンターの〈新・江戸東京研究〉講座に12名の講師を派遣した。 ②研究会2本・シンポジウム3本を一般公開し、多くの聴衆を得た。 ③神田祭における銭湯山車の巡行に際し、新聞社やテレビなど多くの取材をうけた「江戸東京の島」シンポジウムでは雑誌による取材記事が掲載された。 ④本センターの活動に直接に関わった3冊の書籍を刊行した。以上、一般社会への貢献、学術成果の還元を行うことができた。
	改善策	特になし
【重点目標】 当センターの研究活動の特色として、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して進めることを重点目標とする。		
【目標を達成するための施策等】 2024年1月の国際シンポジウムにむけての準備とその開催を目標達成のための施策とする。		
【年度目標達成状況総括】 達成指標に示したように、すべての年度目標を十分に達成することができた。		

IV 2024年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが協働することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。
年度目標	①2024年1月にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で江戸東京に関する国際シンポジウムを開催した。発表メンバーはその内容を2024年度中に英語の学術雑誌に投稿する。 ②2025年1月に法政大学で東京湾に関するシンポジウムを開催予定である。本年度は昨年の国際シンポジウムの英語論文の投稿と新たなテーマによる江戸東京に関わるシンポジウムの開催を中心に、江戸東京研究センターならではの「文理複眼」による研究活動を実施する。これらの成果を発信、アピールすることで、法政大学の基幹的研究機構のひとつであることを示す。
達成指標	①英語論文の投稿 ②「文理複眼」による東京湾シンポジウムの開催、の実現・実施を指標とする。
評価基準	社会連携・社会貢献

中期目標	持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。
年度目標	①NHK 青山カルチャーセンターにおける〈新・江戸東京研究〉連続講座への講師派遣 ②研究会・シンポジウムの一般公開 ③外濠市民塾の本格的な活動再開 ④東京ツアー事業の開始など多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実にこなう。
達成指標	年度目標の①～④において、江戸東京研究センター研究員による講義および研究会・シンポジウムの実施、市民活動や東京ツアー事業の再開・開始を指標とする。
<p>【重点目標】 当センターの特徴としての文理が協働して行う「文理複眼」による研究活動の推進を重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 「文理複眼」による東京湾シンポジウムの開催を目標達成のための施策とする。</p>	